

発行所〓社会通信社 発行人〓滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二―九〇四 電話・FAX(03)3299―5367

郵便振替 〓 〇〇―一〇〇―九―五八四三一 労金〓中央労金本店 No.1154163

〈もくじ〉

■ 巻頭言 ■

現代政治と維新の党

伊勢 太郎：2

乗った、乗りました ローカル線 滝野 忠：3

― 霧幻峡の渡し船 只見線の旅 ―

日本最古の老朽原発 稲村 守：8

高浜原発1号機が再稼働強行！

新社会党党員に訴えます 木山 誠二：10

― 第29回大会報告と団結強化の課題について ―

党の現状を斜めから見ると 原野人：16

読者からのおたより …………… 17

旬刊社会通信

NO.1384

二〇二三年十月一日号

二〇二三年十月一日発行

現代政治と維新の党

千葉の仲間の勉強会「労働・社会科学学習会」が始まったのは2019年2月です。社会主義政党が「カナリア」になり、労働再編成で階級的労働運動が弱くなって、学習の機会が少なくなった。「階級および階級闘争」の世界観をもつ小さな塊をたくさんつくることから、反撃の芽を育てようとの思いからです。

この「学習会」、今年2023年8月で37回を数えるになりました。8月のテーマは「現代政治と『維新』」です。維新、元氣いい。ガラツハの現代代表の馬場伸幸さんは得意満面です。言わなくともいいことをべらべらと。

馬場さんの前任者「茶髪のタレント弁護士」は『政権奪取論』（朝日新書 2018年）「はじめに」で、自民党について「僕は今の安倍政権の政治に基本的に賛成である」と、あつけらかんと述べるんです。ちがいがなければ自民党に行けばいいだけの話です。「茶髪」君と自民党はどこがちがう、肝心なのはここです。

「（自民党政治に）反対のところ、不満なところは多々ある。安倍政権は中央集権型の日本の政治機構（役所システム）を抜本的に変革するつもりはないし、過疎地をどうするかについても『創生』というきれいな言葉でごまかすだけで、『整理』の必要性について語らない、新規参入を促すための既得権打破の規制緩和改革も、既得権を有する業界団体の反対の声に配慮して不十分どころも多い。」

「基本的に賛成」、「『整理』の必要性」、「既得権」、あいまいで物騒な言葉が並ぶ、三百代言の知恵なのだろう。言いたいことは「自民党がやれないもつとも悪い『改革』——つまり改悪——をやる」と宣言しているんです。自民党からすれば、維新は「お友だち、同志。もともと大阪の地方議員の集まりだろう」というわけです。

総保守勢力にしたって、維新は第二自民党みたいなもの、眉を逆立てることもあるまい、いずれ一緒になるよと。

地方選で「躍進」しました。馬場さんが自民党ができないことをやる第二自民党という維新がなぜ支持を集めているのか。維新のバカの一つ覚えは「身を切る改革」。公務員は特権階級という国鉄分割民営化と同じ手法です。たとえば、①特権階級の公務員をこらしめた、②「中之島組」（労組と役所のゆ着）を壊体した、③約束は守ると議員定数・報酬削減を実行し、「都」構想の住民投票で負けたら辞めるを愚直に実行したことであろう。こうしたことが「ブレない」党の評価を高め、①庶民の目線と一緒に、②経済的弱者の味方の評価を、メディアが宣伝し得ていることだ。

支持層は①小商工業者、②労働者の管理層、③上昇志向の若者、④古きよき大阪の夢想者、⑤生活保護世帯、重度障害者等の切り捨てに拍手する階級脱落者たちです。

（伊勢 太郎）

乗った、乗りました ローカル線

― 霧幻峽の渡し船 只見線の旅 ―

旅のごちそう

「只見線に乗りたくないね」に、山浦氏が「行きましよう。予定表つくります」と応えてくださったのは、只見線が廃線の危機を乗り越え、全線運転再開（二〇二二年十月一日）した直後でした。それからというものの、極寒の季節、若葉萌え出る候も、地図をながめ妄想をめぐらせておりました。山浦さんとやりとりし、「タイムスケジュール確定」と、連絡をもらったのは六月六日、六月二十九日から二泊三日の日程です。

旅のごちそうは 一に御天道様、二によき旅友、三に料理、景観と相なります。二と三は百点満点、問題は天気です。梅雨真盛りです。只見線は大渓谷の大河沿いを縫うように走るのですから、大水が出ようものなら興ざめです。そんなこんなでいざ出発進行です。

旅友

旅友は東京の私ども含め五人です。長野勢の山浦隆芳さんと小林Mさん、新潟から宿だけ参加の小林義昭さんです。山浦さんと義昭さんは通信でおなじみですから、改めて紹介する必要がありますまい。

同じ小林さんでもMさんは初めての御目文字（おめもじ）です。三日間の旅で合いわかったことは、Mさんが山浦さん以上の鉄道ファン、いわゆる乗り鉄、撮り鉄の極上の鉄道ファンと見受けられました。さらに、只見線での風体からは呑み鉄とも。お二人は元全通組合員、そして全通カメラ集団の仲間でもいらっしゃる。山浦さんはリンゴ農家を営む個人事業主、農作業の合間をぬってローカル線の一人旅を楽しんでいらっしゃると思いましたが、これはぼくの早とちり、山浦さんはMさんという同志と旅を楽しんでいらしたのです。

廃線の危機

日本は南北二〇〇〇キロと長く、東西は200キロと幅は狭いが険しい山脈が交通を妨げてきました。山間部の旅がどれほど困難をきわめたかは、芭蕉の『細道』にみられます。

明治の文明開化は、交通手段を水運から鉄道へと一変させました。今では陸運―車―が鉄路を食いちぎり、毎日のように鉄路をあの世に送りこんでいますよね。きわだったのが一九九〇年代の国鉄「分割民営化」、国鉄からJRへです。

只見線は、廃線の危機をいくども乗り越え、生き延びてきたようです。日本列島を背骨のようにおおう大山脈を横切るローカル線には、もう一つの敵が襲いかかります。自然の脅威です。川はあふれ、山はくずれ、鉄路をなぎ倒します。危機はくり返し襲い来たります。資本主義の業病である過疎化が拍車をかけます。今、北海道の根室本線が直面しているようにです。

只見線

只見線は福島県の会津若松駅と新潟県の小出駅を結ぶ全長135・2キロの鉄道です。東京から只見線へのルートは二つです。

一つは東北新幹線ルート。東京駅九時四〇分発―郡山十時五八分着、郡山十一時十五分発―会津若松十三時五分着。会津若松で只見線下りに乗り換えです。

このルートは東京からウント近いけれど、長野・新潟の旅友とうまく出会えませぬ。列車本数は会津若松、小出間を直接結ぶのは上下3本と少ないのです。列車の時速は六〇キロ、会津若松から小出間は五時間かかります。一日で往復なんて夢物語です。出会いが便利なのもうひとつの上越新幹線ルート。東京駅八時五二分発―浦佐十時三五分着。浦佐十一時五三分発（上越線）―小出着十二時二分。小出駅で只見線上下りに乗り換えです。

これだと長野組と小出で出会え、只見線を楽しめます。これで決まりと、私めルンルンでいたところ、山浦さんの最終案にビックリです。想定外のルートに仰天です、たまげました。長野の二人組が、どれほどの鉄道マニアかをあらためて思いしらされたのです。

山浦案

山浦案はおもしろい。鉄道ファンでなければの極上ルートです。北陸新幹線開業で私鉄となった妙高はねうま線、分割分割民営で私鉄になったほくほく線とおり上越線を経て小出に出、只見線に向かう旅程です。

はくたか555 東京発八時四四分―上越妙高着十時三一分（乗車時間一時間四七分）
妙高はねうまライン（私鉄）上越妙高発十時五七分―直江津着十一時十三分（二六分）
ほくほく線（私鉄）直江津発十一時二一分―六日町着十二時三二分（一時間一一分）
上越線 六日町発十二時三六分―小出着十二時五六分（二十分）

前記の第二案なら小出まで一時間四三分プラス九分で行ける。山浦案は一時間四七分十一六分十一時間十一分二十分、実に三時間三三分、二倍です。乗り鉄は只見線へとさらにつづくのです。第一日の目的地は小出発十三時十二分―会津宮下着十六時三分の二時間五一分です。わが家を出たのが七時三十分ですから、乗車時間はなんと七時間三五分です。

長野勢とどこで落ち合うか。彼らは北陸新幹線の飯山で乗り込むから、上越妙高。昼飯は飯山名物の笹寿司を仕入れるとありました。（写真は観光案内インターネットより）

席がない

乗り続けること六時間、十二時五六分やつと待ちに待った只見線の入り口の小出駅到着です。只見線に乗れる！ 秘境鉄路への高まる期待、その一方であくたびれた。この時、只見線は人気の地であることをスツカリ忘れておりました。2両連結の気動車であることも。

旅友は跨線橋を渡り、向かい側に止まる列車に一直線です。なのにぼくといえは、

身体を少しでも軽くしようと、短い休憩で時間をムダに使ってしまいました。山浦さんたちをイライラさせたにちがいありません。バカですね、ドジですね。周囲の状況がちつともわかっちゃいない。

出発は十三時十二分、列車に乗り込んだのはぼくが一番最後です。座る席がない！でも四人がけに空いている席、相對二人がけが荷物で占領されている席がチラホラありました。心の中で、「詰めてもらえばなんとかなるさ」とささやいておりました。ところがです、旅友の小林Mさんが2両目車両の一番後の三人掛け席を確保してくれていたのです。感謝です。旅の前には「座れなければどうしよう、腰掛け持っていこうか」など気をもんでもいたのです。

一日目の目的地は二十二駅目の会津宮下駅、着時間は十六時三分、乗っている時間は三時間もあるのです。列車は気動車、空気を切り裂く汽笛を鳴らして出発です。只見線、旅の始まりです。

車窓は緑が深く、原始の山また山である。これがまた楽しい。雪が深いからだろう。民家は二階が一階です。景色は長大なトンネル―あとで調べたところ六十里越えトンネル(6359メートル)―を越えると大きく変わりました。人の気配はありません。自然のなかに延びゆく鐵路、そして小さいけれど歴史を感じさせる駅舎です。(下記写真は観光案内インターネットより)

楽しかったのはワンマンとばかり思っていた列車に若く感じよい車掌さんと旅ができたことです。女性車掌さん、只見駅で下車しました。

乗客

列車はほぼ満席です。乗客は、ノンビリと景色を楽しみたいわれわれと同じ年代の人たち、今はやりのキャリアバッグなど、無粋なモノを持つ者はだれもおりません。手荷物だけを納めたと思われるナップザックが棚にあるばかりです。

列車は只見川沿線を鋭い汽笛を響かせ、ゆつくりと堂々と走り抜けます。只見駅をすぎると次々に橋が現れます。景色がいいところで、列車の速度がよりゆつくりになります。写真撮影の始まりです。撮り鉄さんは多くありません。スマホや小型のカメラを手に行ったり来たりと忙しそうでした。

われわれと同じ年代で、こんな旅の楽しみ方をする人もいるんだと、目を奪われつづけた好爺爺がいました。旅用の大きな地図を広げ車窓をじつくり観察するかに思えば、幼児が電車に乗れば必ずするように、両ヒザをついて窓にへばりついていらした。ぼくも餓鬼だが、彼ほどじゃない、だけどうらやましい。

降りる人はほとんどいません。近代文明の象徴といえるコンビニなどはまったくありません。駅舎はみんな無人駅。どのような暮らしをしているんだろう、考えるのはそんなことばかりです。この地で生活できるかな、とも。

只見川

只見川、清らかに激しく下る清流とばかり思っておりました。そうじゃないんですね。只見線の成り立ちがダム建設にあったんです。川は大小さまざまなダムでせき止

められてるんです。長野の旅友は「霧幻峡の渡し船」に乗りたい、私めは清らかな清流をみたい。

列車の窓から、あなたは上を見ますかそれとも下を見ますか。ぼくは下、溪流と沢です。二人旅のある経験です。たしか岩手県の山奥の列車でした。友は蝶々が大好き、だから上を見ます。ぼくは下です。同じ景色を見ているのに、見るもの考えること、まったく違うのです。人間、どこを見、考えるかで同じ景色もまったく異なってみえるのです。

この日の只見川は濁り茶褐色です。（一週間前ほどの大雨が主たるもの）きのう大雨が降ったのでしよう。ぼくの関心は川の濁りがとれるかどうかでした。明日はきれいになると思ったのは、川と人間の関係を知らぬぼくの片思いでした。

宮下温泉

新潟のもう一人の小林義昭さんは会津宮下の温泉旅館栄光館で合流です。小林さんからは二時頃「旅館に着いた」と連絡です。「チエツクインは三時から」、「山浦でとってるよ」と。これでは部屋で休むことはできません。

四時すぎ、われわれも着きました。宿の車が迎えに来てくれました。「駅から四〜五分」の道のりは、急峻な登山道を見たような地理。小高いところにある駅から宿は、まさに谷間でした。駐車場に新潟ナンバーの車、「小林さんはどうしてる」てなわけです、いました。

栄光館

しっとり落ち着いた宿です。十時間余の長旅です。堅い座席に揺られ続けてきたのですから、身体はガチガチ、何をおいても風呂です。

長野勢二人に「行くよ」と声かけさつさと風呂へ。褐色で熱い湯です。義昭さんは一風呂あびて引き上げてしまいました。

一人残されたところに、新しい入湯者です。われわれ以外に宿泊客はいなかったよ。うなのにも思いながら、「どちらからいらっしたのですか」と問いました。

そしたら、「列車で一緒でしたよ」とのつつけんどんな返事です。

脱衣場からは義昭さんと山浦さんの対話が聞こえます。その時、ハタと思い至りました。入湯者は長野の小林さんだったんだと。長野の小林さん、列車で私たちと会話せず、大きなマスクに黒めがね、ご尊顔を拝していなかったのです。

腹が減った、お腹がくつつきそうだ。案内はまだない。食事は六時三十分。ようやく「食事ですよ」の声。食堂に急ぎます。食膳には食べきれないほどの御馳走が並べられてありました。グルメブームで料理人はたいへんだ。特別料理は馬刺し、目の玉が飛び出るほど高値になりました。何年ぶりの「ごちそう」です。

ホタル

宿の女将や中居さん、「下の沢にホタル出るとですよ」。ホタルは実に久しぶりです。国鉄闘争の学習会で赤峰さんの大分に行つて以来です。早く暗くなれ、ホタル出てこ

いと、川辺に突進です。突進しすぎるとドボンになりかねません。闇夜です。ひと足ひと足踏みしめてです。アソコに見える、ココにもと、ふわふわと動き回る美しく儂い輝きで幻想的に飛び交っています。それも、間近に、たくさんあつまってきた。義昭さんは身体を伸ばし、手を伸ばし……、捕まえることが出来たのです。義昭さんの手のひらで、いつそう幻想的な光を放ち、飛び去っていきました。

女将と大女将は「見れましたか」、「見えました。見れました」とわれわれは各自の部屋へ。わが「かみ」さんは『桃』、ぼくと義昭さんは『栗』、長野勢は『柿』。

刻限はまだ宵（よい）の口、寝るには早い、長野勢に声をかけ酒盛りです。旅の心地よさと長旅の疲れからでしょうか、何を話したか、まったく記憶にありません。明日は七時半ね、とお休みです。

霧幻峡の渡し船

二日目の目玉は、長野勢が待ちに待った「霧幻峡の渡し船」です。長野勢は雨が降ろうが槍が降ろうが何があんでも実行する、しなくて何ものゾとのエライ勢いです。ぼくらの関心は天気です。朝六時半、曇っています。「霧幻峡」といわれるように、霧で曇っています。まだ、雨は落ちていません。渡し船が出る、出ないは、船頭さんまかせです。出立は八時半、宿の主人の車で宮下駅へ。宮下から早戸駅へ。早戸は駅とは名ばかりバス停みたいな停留所です。雨はしとしとびちやびちや止む様子はありません。

ここまでくれば覚悟を決める他ありません。感心したのは、一人旅の女性が渡しを予約していたことでした。彼女は私よりはるかに旅なれているかのようにでした。雨合羽を器用にはおり、靴が水にぬれぬよう靴カバーを持参するといったようにです。

渡し船そして只見川の景色は幽幻です。水墨画の世界をみるようです。われわれに絵心がないのが悔やまれました。雨はやみません。川は濁り清烈とはいきません。（下記写真は山浦さん撮影 絵はがきから）

船頭さんの櫓（ろ）にまかせた四五分の「船旅」です。天も青、地も青の世界が広がってあればよかったのに。これじゃもう一度挑戦する他ありません。

ニゴリ

只見川のニゴリはとれるのか。義昭さんは「とれないよ、一ヶ月かかる」とにべもありません。義昭さんは土木専攻。県で仕事をしていらした。彼は溪流釣りの名人でもあるんです。だから、北信越を中心に山や沢を歩き回っていらっしやる。川の状況にノウハウいんです。

「なぜ」に、只見川はダムが多い。一度にごった川はダムに流れがせき止められているから、回復に時間がかかる。「なるほど」です。後で只見川水系を調べてみましたら、第二次大戦後の電源開発時代に、只見線はダム建設のための路線としてもつくられているんです。ですから大きささまざまなダムが多いのです。

霧幻峡の渡し船の船頭さんは、五キロ前後でダムがある。水深は十五メートルとも。

住む魚は鯉・鮒・うぐい。近くの沼沢湖にはヒメマスがいる、だが、最近とれないとも。

Onsen

下船後、船着き場周辺（平家の落人部落とも）を散策し、温泉（日帰り温泉早戸温泉つるの湯）で、ひとつ風呂、昼飯との予定。雨は強くなったり弱くなったりで降りつづきます。身体も冷えた、温泉に直行です。この温泉は湯治・日帰りの湯、地元の住人たちが三時間六〇〇円を楽しんでいました。

長野の小林Mさん、すぐに地元のオバチャンと仲よくなり、お弁当の漬け物のお裾分けいただいたり、おしゃべりです。歳はわれわれと同じか、少し下、髪は黒々ツヤもある、「染めてるの」に、「ココの風呂入っておればこうなる、元気になる、白くなることない。私ら山ガールで毎日のように来ているのよ」。

つるの湯の「露天風呂」からの「霧幻峡」は幽幻そのものでした。義昭さんに見せてやれなかったのは残念です。

野口英世記念館 そして丸型ポスト

早戸駅から会津若松に向かい、古い街並みを散策する予定でした。嘉津子さん「野口英世記念館に行きたい」。長野勢は元郵便局労働者、仕事がはやい。

早戸駅で列車を待つ間に、「記念館行きますか」、彼女「どっちでもいい」、長野勢「どっちでもいいが一番困る」と怒り声。これにつられて嘉津子さんも本音が言えて、みんなで猪苗代の野口記念館へ。

サプライズです。記念館入り口に、真紅の丸型ポスト。山浦さんは丸型ポストの愛好者でもあるんです。どれほど写真におさめたでしょう。

彼「想定外」と大喜びに見受けられました。

只見線で会津若松に出、会津若松で磐越西線に乗り換ええます。宿は会津若松ですから猪苗代からトンボ帰ります。宿には午後六時前に到着です。会津の町家の食堂を探しながら歩き回りましたのですが、雨は止みません。雨に濡れそぼちの探索はあきらめ、大きなホテルの食堂となったのは残念至極という他ありますまい。

西洋料理を喰いながら明日（三日目）は七時半ここに集合と部屋へ。三人三様の気楽な旅です。朝飯食ってその場で解散です。小林Mさんは新潟まわりでこの日にご帰還、山浦さんは郡山に出、盛岡まわり二日にご帰還。私どもは郡山から東京へです。

いちばんの思い出は、雨に降られた霧幻峡の渡し船、そして五時間も一緒に電車に乗っていた旅友なのに、「あなたどちらから」の私のひと言です。（滝野 忠）

日本最古の老朽高浜原発1号機が再稼働強行！

― 若狭湾・びわ湖を汚すな！ 原発前で抗議行動・デモ ―

「40年たった原発はうごかしてはならない」、というのが福島第1原発の過酷事故、原発、世界最大の事故を踏まえて決定された法律である。「神の火」のおきてを破った関電と岸田政権には、間もなく天罰が下るであろう！

カンカン照りの高浜原発と地元・首海の集落と内浦湾を望む展望台に、正午前に参集した地元・福井、近畿各地、四国伊方原発地元からの憤る市民は、高浜原発北ゲートまでデモ行進し、2時間の抗議行動を展開した。

おおい町出身の文豪・水上勉の原発に関する論考をまとめた著作や、この日もデモの先頭に立たれた小浜市・明通寺の中嶋哲演さんの著作『原発銀座・若狭から』(1978年)などを見ても、若狭の住民の方々は、危険な原発を受け入れるのは諸般の事情で既成事実化されても、「30〜40年で終わる事業」という受け入れ時の賛否どちらであれ共通した言わずもがなの約束ごとであったようである。

それが今や、40年廃炉の法制の「例外中の例外」をいかくぐるのに飽き足らず、60年超、70年でも、80年でも無制限のアリ地獄を時の岸田政権、自民党・公明党・維新の会・国民民主党4党の横暴で国会採決も強行した。

何ら規制もしない原子力規制委員会。核ゴミ全体の5%足らずを20年代中にフランスへ送るからと、「これで課題の23年末までの核ごみ中間処理施設県外建設達成」であるなど言う、姑息にさえなっていないでたらめさ。

9・1 関電本店前での午前10時から午後4時までの「一食断食」(数百人でのハンスト決行)、8・13 頃の太平洋へのフクイチ放射能汚染水放流への抗議行動・デモ、12・3の大阪での「とめよう! 原発依存社会への暴走 1万人集会」うごかすな老朽原発」なども、この日の行動呼びかけの「老朽原発うごかすな! 実行委員会」の木原壮林さんから改めて提起があった。

福島から滋賀県びわ湖湖西に避難されてきた青田恵子さん、被曝労働を強いられ短命の仲間の問題を告発する釜ヶ崎日雇労組・三浦副委員長、伊方原発反対闘争現地の仲間、毎月1回の脱原発デモを12年続けてきた滋賀の岡田啓子さん、大阪、京都、若狭を始めとする地元福井県の方々の思いの込められた、絶対に老朽原発再稼働許すまじの決意のほどが、こもこも何十人からマイクで訴えられた。

参加者一同からの関西電力・榊原会長以下への、「貴職らが、圧倒的な『老朽原発うごかすな!』の民意を蹂躪して老朽原発を稼働させ、重大事故が起こった場合、それは貴職らの故意による犯罪であり、許されるものではない」とする「申し入れ」を提出し、「高浜1号機の再稼働反対! 48年越えありえない!」「核のゴミを未来に押し付けるな! 子どもたちの未来を奪うな!」と、炎天下 1000人の老若男女の市民は声を枯らした。

(さいなら原発・びわこネットワーク 稲村守)

新社会党員に訴えます

―第29回全国大会報告と団結強化の課題について―

1、民主主義の「徹底」 新社会党強化には、民主主義の「徹底」が求められています。

私は、二日目に発言が許されましたが、事前に提出した発言原稿の内容に議事運営委員会でクレームが出て一部修正しての発言となりました。

大会という顔を合わせての会議で事実を伏せて議論しなければならぬ新社会党の閉鎖的な風潮には閉口します。隠し事のない議論でなければ団結は強化されません。また、その根底には「信頼関係」をつくる日常的な議論や闘いがなければなりません。私も、道本部の会議では、理解されないのではないかと自分の考えを全部話していないことを反省しています。

2、「一問一答」 大会は徹底的に議論する場にしなければなりません。

新社会党は、結党当時の厳しい状況から「その位でいいから」という曖昧な風潮を許してきた経緯があります。本部は、代議員の意見を党強化のための「論戦」と受け止めるのではなく「本部批判」ととらえて対決の構えでは民主主義とは言えません。代議員が納得する本部の集約答弁になっていない現在の大会形式を改めて国会の委員会のように「一問一答形式」するべきだといつも考えています。委員会形式にすれば、お互い相当勉強しなければならぬことから、真剣な議論と民主主義が徹底されることとなります。曖昧なままに「団結がんばる」で終わる大会は止めるべきです。

3、党綱領「再確認」 大会の一番の成果は、党「綱領・21世紀宣言」を再確認したことです。

加藤副委員長は、「斎藤幸平理論を」バツサリと切り捨てました。加藤副委員長は、シュプレヒコールの前段に、長い訴えを行いました。その中でマスコミに取り上げられ、新社会党の中でも一人歩きしている「斎藤幸平東大准教授」の社会主義論を「斎藤幸平は『ゼロからの資本論』で何も言っていない」とバツサリ切り捨てました。「斎藤幸平理論」を支持している党員は、加藤副委員長の「斎藤幸平理論」切り捨てでどう判断するのか。

まったく学習していなかったことで流してしまうのか。党綱領に異議を唱えるのか。今後の重要な課題となります。ソ連・東欧の社会主義が崩壊したことや、社会主義中国が、「市場経済」を取り入れたことで経済は世界2位の経済大国になったことで、新社会党の綱領に疑問をもっている党員も考えられます。「市場経済」を取り入れた社会主義はどうなるのか学習・議論を強化する必要があります。

加藤副委員長が、「斎藤幸平理論」を切り捨てた背景は、書記長が答弁しなかった、私が質問した「社会主義論の再考」の用語解説で説明されている「社会主義論」に出て来る斎藤幸平氏の主張に対する見解だと考えます。

4、理論と実践 社会主義革命は「理論と実践」を学ぶことですが、問題は「実践の

理解」です。

社会主義革命の理論は、「綱領・21世紀宣言」を読むことで理解を可能としますが、革命の組織づくり、社会主義革命、そして革命後の社会主義を発展させる「実践」を学ぶことは大変難しい問題です。「実践」を理解するには、資本主義的合理化の視点を持つてしっかり闘い、資本の「弾圧・懐柔」攻撃に動揺し苦悩する仲間の「心を学び取る」ことが重要です。逆に、反合理化闘争を組織して闘った経験がなければ「実践」を学ぶことは非常に困難と言えます。

それは、反合理化闘争を闘うことで、弾圧され処分されることで、激しく動揺して組織脱退という最悪の人間関係の状況になるからです。

私は、国鉄解雇撤回闘争で、支部内の責任者に組織脱退が出るから十分議論をするようにと話したところ、物静かで誠実な団長から「委員長は脱退主義者か」と抗議されました。その後、暫くしてその団で組織離脱があり団長は肩を落として自信をなくしておりました。

解雇撤回闘争は、資本にとっても死活問題であることから、雇用不安、生活不安を煽り生活環境の違う一人一人を、「弾圧・懐柔」の分断攻撃で組織脱退を強要するのが資本の常套手段なのです。

国労闘争団で学んだことは、雇用不安に陥った人は、私たちの呼び掛けに耳を貸さなくなります。心を開いてくれません。雇用不安はそれほど精神的に強いダメージを受けるのです。雇用不安に陥った人の奥深い心までたどり着く努力をしなければ、心を開いてくれないことが分かりました。

三池労組も国労も、解雇撤回闘争で、弾圧そして懐柔で第二組合を結成され少数派に追い込まれて敗北しました。また、組織脱退、組織分裂だけではなく、三池労組の闘いには、福岡の二つの暴力団が警察に守られて三池労組を襲撃して組合員の久保さんを殺害しました。

国鉄分割・民営合理化攻撃では人権侵害の「人材活用センター強制収容」や、200名を超える国鉄職員を自殺に追い込んだのです。

政府・独占の労働者の命をも奪う「弾圧・懐柔」に、苦悩する心を理解する思想を確立することは重要な闘いです。

社会主義革命闘争や社会主義建設に対して反革命が予想されます。これに耐える力になるのです。反合理化闘争は社会主義革命の「心の実践」を学び鍛える重要な闘いなのです。

5、実態討論① 愛知県本部の代議員は、重要な運動を提起しました。それは「実態討論」です。

愛知県本部では、「実態討論」と「党員を大事にする」運動を取り組んでいるということですが。実態討論では、家庭・家族のすべてを出し切り信頼関係を高めることで党員を大事にする結果になっているということです。

何を言っても嫌われない党になっているということですが。「実態討論」から民主主義・人権を学んだ成果といえます。大変素晴らしい闘いです。

資本主義思想の常識に侵されている我々は、実態は自分の責任とされていることから、実態を語ることは「惨めで恥ずかしい」ものだという認識にさせられて、「実態討論」ができない実態となっているのです。愛知県本部では、これを取り越えて団結強化に取り組んでいます。

6、**実態討論**② 国労旭川地本（他でもそうでしたが）が強くなったのは、国労旭川地本の松里青年部長が進めた「実態討論」の徹底にあります。そして旭川地本の闘争団が、国労本部の統制処分を受けながらも「鉄建公団訴訟（JR採用差別後の国鉄清算事業団解雇訴訟）」をリードして闘い、政府・独占の「階級的労働運動」解体攻撃に「一矢報いる」（加藤弁護士の弁）闘いで解決をしたのです。

7、**実態討論**③ 労働運動で「実態討論」を闘う方針として理論的にしたのは、社青同第12回大会です。三池労組の闘いから学んだ「生命（いのち）」と権利を守る闘い」です。当時の地域「青婦協」運動で、社青同の「実態報告」を革マル派は「経過報告だ」と激しく批判しましたが、これは社会党内にもあった意識です。しかし、この「実態討論」で鍛えられた青年党員が、「実態を語る」から「実態を聞く」という地域運動・選挙運動で社会党強化に貢献したのです。本部・道本部は、愛知の「実態討論」・「党員を大事にする」闘いに学ぶべきです。

8、**「発言」**① 私の発言の一つは、2020年、第25回方針の「社会主義論の再考」とこれに関連して提案されている用語解説の「社会主義論」は、新社会党の綱領（21世紀宣言）に反する内容であり、これを本部（組織）が学習を薦めることは組織違反であると主張して、「社会主義論の再考」を提案した狙い（理由）を求めました。

書記長は「答弁に間違いのないように発言者から25回大会の議案書を借りて読みましたが、社会主義論の再考・・・常識としてきた原則の点検も活発になっている。若い世代との対話・・・組織的学習は必須である。用語解説として社会主義論は書かれている。」という答弁で終わりました。

方針には綱領を変えろとは書かれていませんが、「用語解説」の「社会主義論」では国有化、計画経済を否定する内容になっていることについて質問したのですが、肝心の答弁はありませんでした。私たちは過去に社会党を解体した苦い経験をもっていることから、綱領を曖昧にすることは許されません。

9、**「発言」**② 私の発言の二つには、北海道本部書記長の「感想」問題で大量離党・大量機関紙減部という組織の異常事態に中央本部が何らの指導もしなかった責任を追究し、理由を求めました。しかし、委員長は、まったく触れませんでした。

「答弁漏れ有り」としてヤジを飛ばそうと思いましたが、ヤジを受け止める組織状況にないと判断して止めました。参院選挙にも影響した大量離党問題を放置しても、中央本部方針を全面的に支持する（3年前の大会での道本部書記長の発言原稿）道本部執行委員会を擁護したいのでしょうか。しかし、臭い物に蓋をする運動は、人権・民主主義思想が腐敗し団結の強化とはなりません。

委員長は、集約で、人権・民主主義擁護を高らかに主張しましたが、北海道本

部書記長の「感想」問題による「大量離党」を意図して主張したとしても、不法・不当な「感想」を撤回も謝罪もしない北海道本部には届かないことでしょう。大量離党という重大な組織問題を指導できない本部の指導力では、政府・独占の労働者攻撃に抵抗闘争を組織できないことは当然であり憂慮すべきことです。後述する「格差拡大・貧困」との闘いも、「4号・5号」議案も「絵に描いた餅」で終わることになります。

10、「発言」③ 私の発言の三つには、憲法9条改悪を阻止するには、弱小の新社党の力を削がずに、立憲野党の共同行動に全力を傾注することを主張して、札幌中央区の立憲野党と市民の共同行動（ストップ9条改悪！国民主役の政治を！中央区実行委員会）に参加して、月に9回（朝街宣5回、昼街宣4回）の街宣を行っている運動を報告しました。朝街宣5回の内1回は二つの高校生（南校・静修高）が利用する地下鉄「幌平橋駅前」で行っていて、5年前に始めた頃はお互いに緊張感が張り詰め、ビラの入った「ポケットテシュー」の受け取りも少なかったのですが、今では「ガンバレ」という男子高校生や女子校生の声援も出て「ポケットテシュー」も完配する状況です。

私は、街宣の9回の内8回は最後の締めを担って訴えています。前の4人と重複してもいいように事前に情勢や歴史的経過を調べて、また重複する課題も別の視点から訴えて前の4人の発言を豊富化しています。また、目に訴えることの重要性から、コンパネ縦半分の大きさにした「プラダン」にパソコンで訴え文を作り、コピーで拡大して貼り付けて看板にして掲出しています。効果は絶大です。横断歩道の赤信号で本を読むのを止めて看板に目を釘付けにしたり、看板を見ない振りをして目だけ左側に落として読む人がおります。

11、「第三極」？ また、憲法9条改悪阻止闘争に関連して、大会初日に東京の女性代議員が、「第三極を批判する声はありません」という「第三極」を支持する発言があったことから、これに反論の形で発言しました。

私は、「第三極」を不要とする理由は「第三極に批判があったかかったか」ということではなく、憲法9条改悪を阻止する力は立憲野党の共同行動でしかないことは明らかであることから、弱小の新社会党が第三極で自らの力を削いでいたのでは、立憲野党の共同行動を支える力にはならないということを主張しました。しかし、2日目にも東京の男性代議員から「第三極に運動の支障はありません」という発言がありました。

厳しく批判します。今の情勢で、月に一回や二回、数回の街宣行動で国民を組織することが可能と考えているのであればまったくの誤りです。ロシアのウクライナ侵略で国民の意識が「少しは軍備を拡大することはやむを得ない」という意識が増えている状況をどう考えているのか。

私は月に9回、年間100回の立憲野党の共同街宣行動を6年間継続して、立憲野党の統一候補を当選させる力になっておりますが、何時も不安を感じており、札幌市内全10区にどう闘いを広げるかを考えて立民と共産の市議と話し合っております。

月に一回、二回や数回の街宣行動で憲法9条改悪を阻止できると考えているとすれば、国会発議され国民投票が可決されても国民投票で勝るとのんきに考えていることになりません。自公・維新の攻撃が激しさを増している状況で全力を出し切って行動しなければ、国民の信頼を継続することもできず勝利の展望へつないでいくことも不可能です。

衆議院の憲法審査会は、自民党はもとより維新の突き上げは激しく、馬場代表は憲法擁護の立憲民主党をぶつ潰すと攻撃しています。また、7月18日に開催された保守の「正論」懇話会で杉原誠四郎元城西大学教授は、「再軍備反対」を主張した吉田茂元首相を「敗戦利得者」だと激しい批判をはじめています。安倍元首相の「戦後レジームからの脱却」を成し遂げるためには、吉田への批判なくしてありえない。と歴史の再評価を求めています。吉田茂元首相は、麻生太郎自民党副総裁の祖父であるにもかかわらず、改憲のためにはなりふり構わない姿勢に転じています。

維新の和田有一朗衆議は、国会で「台湾は日本の生命線だ。」と発言しています。「生命線」発言は、1931年の国会で後の外務大臣である松岡洋右が「満蒙は日本の生命線だ。」と発言してこれが侵略戦争のスローガンになった言葉です。そして、15年戦争がはじまったのです。

12、集約、答弁等 岡崎委員長と長南書記長の集約、加藤副委員長のシユプレヒコールでの主張の分析について

① 委員長は、「21世紀宣言(党綱領)」は直ぐできないことは皆知っていると発言しています。皆が知っていることを何故言わなければならないのか。今は革命の情勢ではない。国民に支持されない。選挙で勝てない。第三極は社会主義革命ではないから「社会主義革命」という言葉を使うなど言っているのでしょうか。

代議員は、社会主義革命を主張して運動を展開しろと主張しているのではなくありません。労働者の「命と権利」を守る闘いの思想(綱領・21世紀宣言)がしっかりしていなければならないことから党の「思想的ブレ」を厳しく指摘しているのです。本部は自らが「思想的ブレ」に気付いていないのです。「思想的ブレ」をその都度厳しく指摘する民主主義の徹底が必要です。ソ連社会主義崩壊の原因も民主主義がなかったことにあります。委員長は、「第三極」は社会主義革命思想ではないことから、これを気にしているのではないのでしょうか。

② 長南書記長は、前述したように2020年・25回大会の方針を誰が書いたかは別にして、綱領(21世紀宣言)を否定する内容であることは事実なのでそこから誤りをはっきり答弁するべきですが、何故、誤りを明確にしないのか民主主義の否定であり綱領をないがしろにする姿勢です。

用語解説に斎藤幸平准教授の名前が載っていることや、週刊「新社会」の「労働短信」コーナーで伊勢太郎氏が、斎藤幸平理論を厳しく批判したことで原稿採用禁止となったことが影響していると考えられます。いずれにしても、質問の主旨に誠実に対応することが基本です。

③ 「斎藤幸平理論」をバツサリ切った加藤副委員長の判断は高く評価されます

が、「教条主義」批判の発言をしています。厳しい批判のあったベーシックインカムや「4号・5号」議案の本部方針の正当性を主張していると考えられます。この反対を執拗な行為と受け止めての「教条主義」という言葉になったものと考えられます。

13、闘いは情勢分析から 今日的情勢で闘うには、世界資本主義の情勢分析の総括が必要で。そのためには、ブレトンウッズ体制の発足とブレトンウッズ体制の崩壊の認識と総括から学ぶことで闘う思想と決意が強化されます。

ブレトンウッズ体制は、世界資本主義を維持延命させるために発足した戦後資本主義経済の国際的枠組みの総称です。

資本主義列強は、市場取り合いの帝国主義戦争を続けていけば、社会主義国の拡大になるとして、IMF や IBRD、GATT の確立で世界資本主義経済を安定させ「赤化防止」対策として完全雇用と社会保障を掲げ、戦後世界資本主義は未曾有の経済成長をとげたのです。

しかし、アメリカ経済の衰退で1971年に金とドルの交換停止、さらに73年に固定相場制から変動相場制に移行したことから、世界資本主義経済の破綻がはじまったのです。

欧州や日本の戦後復興のためにアメリカ資本が世界に進出したことでグローバル経済化と多国籍化が急速に進んだことと、ケインズ政策の破綻もあり、市場原理の新自由主義経済が主張されたのです。そして、階級的労働運動の解体攻撃をおこない、米レーガン大統領の航空管制労働組合つぶし、英サッチャー首相の炭鉱労働組合つぶし、そして日本では中曽根内閣の国鉄労働組合つぶしとなったのです。

ブレトンウッズ体制の崩壊で、世界資本主義経済の調整ができなくなり多国籍独占資本の競争が労働者階級に対する犠牲を必然としていることが今日の「格差拡大・貧困」の原因です。

資本主義の維持延命の攻撃ですから労働者を守るには、「助けてやる」程度の気持ちや闘いでは解決することは不可能です。正に、資本主義と闘う社会主義思想を確立し、労働者を総決起させる闘いを組織しなければ政府・独占を追い込むことはできません。

労働者はアキラメ、白けていますが、こういう情勢では社会主義政党である新社会党の出番です。資本主義の矛盾を暴露して社会主義の優位性を政府・独占に迫ることができるのは社会主義政党である新社会党です。この確信を持てるかどうかにかかっているのです。

1981年の「第二臨調」合理化攻撃で闘いを放棄してから42年です。世界資本主義の情勢を認識して本物の闘いをしなければなりません。(以上)

最後までお読みいただきありがとうございます。ご批判、ご質問をお願いいたします。
「北海道本部代議員 木山誠二(札幌圏総支部・元国労稚内闘争団長)」

党の現状を斜めから見ると

今次党大会の最後の団結がんばろうで、加藤晋介副委員長が、社民党と一緒に闘うことは社民党に飲まれることであってはならない。斎藤幸平には部分的に学ぶべき点もあるかもしれないが、国家論も変革の主体論もなく科学的ではないという趣旨の発言をしている。

この間長らく、非科学的な社会主義協会は党の中に執拗に幻想を持ち込み、中央の指導部を混乱させてきた。ベーシックインカムは中央指導部にとって魅力的な政策に見えた。しかし今では極右政党の維新の会が基本政策の一つにしている。さすがにこれにいつまでもこだわるわけにもいかなかった諸君は、完全に放棄することをしないうまま「研究課題」などとしてごまかしている。

協会はまた、新自由主義が国家独占資本主義にとって代わって支配するようになっていて、多国籍化している独占資本は独占資本ではなくなつたかのように規定して、わが党中央を混乱させてきた。いうまでもなく新自由主義も、アベノミクスも、新旧のケインズ主義等々もすべて国家独占資本主義の政策である。

協会の共同代表2人は党の中執を降りて、社民党との「共同テーブル」に専念するのだろうか。「護憲の第3極」を作ろうなどとして立てた方策は、自治体議員を増やすべき貴重な党費を浪費しながら、すっかり失敗して、わが党の獲得票はごく少なく、惨めな敗北に終わった。

新潟県本部の修正案のように方針は変えるべきなのに、かつての日本軍部のごとく猪突猛進して、第3極づくりにこだわるという。これを主張する首謀者は、加藤副委員長にさからって社会主義とは無縁な社民党の中にあくまでも合流し、飲まれたいごとくである。

第25回大会で社民主義に近い斎藤幸平君の屁理屈を少しばかり紹介して、これらの方針にしようとした諸君は、斎藤君の屁理屈を利用して社民党への合流を目指したのであろう。『週刊新社会』のコラム「労働短信」で斎藤批判をした伊勢太郎氏はコラムと筆を奪われてしまった。収奪者・独占資本を収奪する必要はないと考える斎藤理論の核心はこうである。

「今の資本主義の枠内で、徐々にコモン（共有財産）を広げていけば、どこかで不可逆的な転換が起こり、コミュニズムに相当する社会、少なくとも資本主義とはいえないような社会になるはずだと彼（マルクス）は言っていたのです」と斎藤君は屁理屈を言う。ブルジョア理論家や社民主義者が喜びそうな屁理屈であり嘘である。もし晩年のマルクスが本当にこんなことを言っていたとすれば、マルクスはエンゲルスと協力して、『資本論』や『ゴータ綱領批判』や『共産党宣言』や『反デューリング論』の主要部を全面的に書き換えていたはずである。

斎藤君はマルクスの名を語りながら、このように大きな嘘をいう。

このような斎藤理論になかば共鳴し利用して、社民党への流れ込みをはかろうとする諸君、加藤弁護士が支援を惜しまなかった国労闘争で頑張ってきた北海道の多くの

仲間に対し、離党を止めようとしなかった諸君に対し、加藤副委員長が、かなり遠慮した言いまわしをしながらも、憤りを込めてこれを批判したのは当然のことである。う。
(原 野人)

読者からのおたより

気候変動ーマルクスエンゲルス、向坂 ムジカーザでの演奏会の翌日は、神田の古書店街を散策し午後5時新宿発で帰松の予定でしたが、結局正午初の列車で。猛暑日の屋外、新宿で紀伊国屋書店に逃げ込んだりも、私には冷房がきついのです。

信州松本も連日真夏日時々猛暑日。居間のエアコンも11時頃から15時頃までは連日稼働の異常状態です。一応居間にはエアコンあります。自室では古い扇風機、「上鷲ノ宮5丁目18番9号」の居間にあったそれです。

NHKのBS番組で、気候変動等々を扱った番組を見ると、エンゲルスの『自然の弁証法』や向坂先生の『経済学方法論』の一節を思い起こします。向坂先生は、人類は「自然」と「社会」という二つの世界に生きていと述べ、「自然」と「社会」とを、差別と統一において理解すること、この理解のためになされた努力の痕跡こそ、「人類の全思想史」だということです、史的唯物論です。マルクス学の正しい理解の仕方を、向坂先生は示しているのです。学ぶに如かず、です。

(2023年8月5日 信州松本 中澤秀行)

音威子府 近況 暑いですね。小林義昭です。今、新潟市西区は37℃です。

北海道の元闘争団員をめぐり、8月5日に新潟に着いて以来連日35℃です。天気は2週間先予報でも連日晴天、特に9日・10日は台風がらみのフェーン現象で38℃の熱風、最低気温も30℃、大分の赤峰さんの所並みです。東京は雨が降り少しすこし易そうですね。

音威子府は帰りのフェリーに乗るころ、全道ニュースにのるくらいの降雨で天塩川が10メートルも増水したようです。その上に増水している時に上流のダムが保護のために緊急放流をやったために、輪をかけたようです。

北海道北部は豪雨がなかったので、計画降水量が本州より小さく河川断面が小さいことがあります。最近では北海道も豪雨や梅雨も本州並みになってきましたので、河川改修が追い付かないので頻繁に洪水が発生するようになるでしょう。

音威子府の元闘争団員、今、村会議員の小西さんの次男の家が床下浸水したとのことです(音威子府で床上1床下1)。床下だけでも後始末が大変です。それでも始末が出来ればよいですが、最近の家は床下の隙間がほとんどなく、畳をはがして床を剥ぐというわけにいかないのです、密封構造は濡れたベニヤの親分の湿気を抜くに変で、家の寿命に影響してくるでしょう。

国鉄闘争から長くなり、北海道の仲間も次の人生に歩みだしました。関野さんは7月から旭川に家を購入して娘さんと3人で暮らしています。昨日転居の手紙が来ました(そちらにも行ってるかもしれません)。

千葉真貴子さんも、今年いっぱい「eco音威子府」を定年退職して、生まれた土別に動く予定とか。坪坂一明・厚子夫婦も今年いっぱいくらいで完全に札幌に移るとのことです。

杉山夫婦は後3年の議員任期が残っているので音威子府。同じく村議の小西さんと2人は、後釜を見つけることができるでしょうか。
(2023年8月5日 新潟 小林義昭)

猛暑の原因 異常気象なのか命に関わるほどの猛暑が続いています。よくよく考えて見ると世界中の資本家どもが自然を壊した結果が異常気象になったのではないか、また異常なほどの利益をえるために労働者を食い物に、つまり被害は庶民である、何時の時代もぬくぬくと生きているのが資本家と言われる総人口の1%である。本来は労働者に分配されるべきであるが、過去30年は実質賃金は上がっていないため生活苦になっているのである。

それだけではない消費税が10%となれば低賃金者には大増税につながり、ますます苦しい、年金生活者も同じである。財務省は2022年度の一般会計の税収は71兆1373億円で3年連続で過去最高だったと発表した。前年度より4兆円増え、70兆円に乗るのは初めてとか、その中でも消費税が群を抜いて多い悪税である。

大企業の内部留保は2021年度末で484・3兆円だからもはや2023年度は600兆に迫っているのではないか。それでも飽き足らず未曾有の事故を起こした責任も取らず「生物の宝である海」を汚そうとして「一番安上がり」の海へ汚染水を放出しようとしている。この問題は福島県民、漁業者だけではない。遺伝子(DNA)に関わる重大な問題である。

(2023年7月29日 原発事故被害者相双の会 國分富夫)

特賞受賞!

2023年5月1日の第94回メーデー写真コンクールで特賞受賞、小生の作品が特賞を受賞しました!(審査会は本年7月5日)

1975年1月7日の京都総評入局以来、ずっとメーデーの事務局の担当の仕事させていただき、京都のメーデー労働者とともに49回…半世紀近く歩んできて、このような榮譽をいただき、たいへん光栄です。

コンクール審査員の日本写真家協会会員の溝縁ひろさんのコメントは、「メーデーらしい雰囲気がよく出ている。メーデー大会の様子をよく表現し、背景がうまく入れられている。」

※ 向かって左が京都府本部・駒井書記長、その隣が穀田衆議です。

(2023年7月19日 稲村守)



編集後記

七月二七日から三日間、久しぶりの北海道、帯広行きです。二人と三家族からお誘いです。毎夏、闘争団家族を行脚する山下俊幸さんと小林義昭さん、そして兼子(和之・千栄子)、米澤(昭彦・恵子)ご夫妻、木下由季子(栄ちゃんの連れ合い)です。

国鉄採用組は今年で卒業です。広域異動で東京に追いやられた仲間たちはぞくぞくご帰還です。東京はさみしくなる一方です。彼らはふるさとの生活がいかに豊かで楽しいかを毎日のように連絡してくれます。うらやましい、彼らの新居、生活そして闘争団の仲間の昨今を覗(のぞ)いてみたいが目的です。

ビックリしたのは帯広が暑かったこと、飛行場の様変わり、そして北海道がデックードウあったことです。初日は兼子宅で米澤、木下、小原さんと歓談、翌日は十勝の自然を満喫し闘争団OB会(「社会通信」読書会)、久しぶりに池さん、繁ちゃん、樋口さんと面会です。

三日目は北海道のデッカサを思い知らされました。九時半出発で、神田日勝記念美術館、新得共働学舎、そして十勝の森めぐりです。ゆったりしました、のんびりしました、楽しかった。米澤さん、木下さん、兼子さんらで、綿密な下調べまでしていただいでのご案内、ありがたう。凍るかと思つた帯広、暑かった。